JOURNAL GALLERY

毎号アーティストをピックアップしてご紹介します

「 Documentation of Hysteresis －2011.1.9－ 」
2011

Hyslom（ヒスロム） 加藤至、星野文紀、吉田祐からなるアーティストグループ。2009年より活動をはじめる。造成地の探険で得た人やモノとの遭遇体験や違和感を表現の根幹に置き、身体を用いて土地を体験的に知るための遊び「フィールドプレイ」を各地で実践し、映像や写真、パフォーマンス作品としてあらわす。またその記憶を、彫刻作品や舞台、映画へと展開させている。2016年度より宮城でのリサーチを開始しており、せんだいメディアテーク7階ラウンジにて2月21日(火)まで活動紹介展示を開催中。2018年度には成果展を開催予定。

art node

せんだいメディアテークのコンセプトのひとつに「端末（ターミナル）ではなく節点（ノード）である」という言葉があります。そこからノードを抜き出し、再解釈し、「アートノード」を2016年からスタートしました。

node 結び（目）、こぶ、ふくれ／（創などの）筋のもつれ、船斜／（組織などの）中心点／【植物、植物学】節（せつ）（茎の枝や葉の生じる所）／【医学】結節／【天文】交点／【数学】結節点（曲線の交わる点）／【物理学】波節（振動体の静止点）／【言語学】節点／【語源】ラテン語「結び目」の意 ― 出典：『新英和辞典 第6版』研究社（1994）

「優れたアーティストのユニークな視点と仕事」と、地域の「人材、資源、課題」をつなぐ

現代アート作品にまつわる調査、企画、制作、発表までの過程を人々と共有し、活動にたずさわることのできる機会をつくること。そして、多くの人が関わり、熱のある「アートの現場」を仙台につくりだしていきます。

※「アートノード」は「せんだい・アート・ノード・プロジェクト」の略称です。

art node JOURNAL

アートノード ジャーナル 1号
2017年2月13日 発行

アートノードの進捗を広く伝えるとともに、アートが東北の人・資源・課題と接続するためのアクティビティに焦点をあて話題提供を行います。

編集長 甲斐賢治（せんだいメディアテーク）
編集 渡邊曜平（せんだいメディアテーク）
長内綾子（communa）
高橋創一（communa）
アートディレクション・デザイン homesickdesign
印刷 株式会社文展美術印刷

artnode.smt.jp

お問い合わせ・企画・発行
せんだいメディアテーク（公益財団法人 仙台市市民文化事業団）
〒980-0821 宮城県仙台市青葉区春日町2-1 TEL: 022-713-4483
E-mail: artnode@smt.city.sendai.jp／URL: http://www.smt.jp

SMT せんだいメディアテーク sendai mediatheque 仙台市市民文化事業団設立30周年記念事業

© 2017 sendai mediatheque All Rights Reserved. 本紙記事・写真・イラストの無断転載を禁じます この用紙はリサイクルできます。

アーティストの仕事場 ① 青野文昭さん アトリエ訪問記

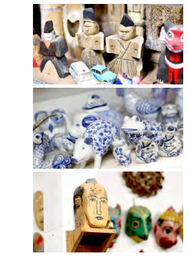
仙台市中心部から西へ車で30分、広瀬川上流沿いの自然豊かな地に青野さんのアトリエがあります。そこは一歩足を踏み入れると、さながら民芸品博物館のような佇まい。青野さんご自身がアジア各国に赴き、蚤の市や土産物店で購入してきた色とりどりの人形やお面、動物の置物がところ狭しと並んでいます。今回は、民芸品収集のきっかけとご自身の作品との関係について伺いました。

ところ狭しと並べられたアジア各国の民芸品の数々

「ここでは大型作品の細部の仕上げ作業や、小品の制作などをおこなっています。『修復』という発想で作品発表を続けていますが、アジア各地の民芸品を集め始めたのはその前からなんです。顔をモチーフにしたものや色鮮やかなもの、何より生き物に興味があり、少しずつ調べながら集め始めました。工場で生産されたものではなく、少数民族の知恵や技の伝承を感じるものや、あと数年したら無くなってしまうかもしれないものを探すようにしています。日本のものだと、こけしや張り子の人形など、江戸期の情緒を感じるものが多いですね。いずれも高価なものではなく、素朴さの残る手仕事品がほとんどです。

自然信仰・民間信仰の詞を訪れると、木の節をうまく利用した木彫の人形なんかがあり、それを真似てつくってみたり、干支の張り子や縁起物（えんぎもの）様をつくったりもしていて、実はかなり以前から私のホームページ「青亀堂」で売っているんですよ（笑）。ただ、美術作品として発表することはせず、作品制作とは平行な位置にあるものだと考えていました。ところが、美術の近作では衣服をモチーフにしたものや人の姿が立ち現れているので、いずれ両者がつながってくるのもしれません。

作品の素材は、近代の量産されたものを使うことが多いので、現在の日常を把握する感覚はあるわけですが、千年後に見たらどうだろうということを考えます。ここにいると、名も無きつくり手による人形やお面の強烈な存在感と対峙しながら作品制作を続ける緊張感はありますね。」



[上] 東北の庶民に伝わる雛人形を模した青野さんの木彫品 [中] タイの寄白陶磁器（ブルー＆ホワイト） [下] 学生時代に制作したという木彫作品は、ユーモラスな存在感

青野文昭（あおの・ふみあき）1968年仙台市生まれ、同地在住。在学中から「修復」という概念を作品に取り入れ、捨てられた物を収拾して、その欠損部分を修復することで彫刻作品を制作している。2017年9月より武蔵野市立吉祥寺美術館で個展開催予定。

「なおす・代用・合体・連鎖（震災後開上で収拾した紙色の衣服から・人物の面影）2015」2015／収拾物、中古家具、アクリル系絵具、その他／250×230×100／撮影：小岩始

酒井朋子

東北学院大学 教員

小浜耕治

東北HIVコミュニケーションズ

テーマ「こぶ」する一冊

現在の職に就くことに関与した一冊

笑い／不気味なもの

H・ベルクソン／S・フロイト
原章二訳／平凡社、2016

幼い頃から怖い話や怪物に惹かれた。人文書院『フロイト著作集』で「不気味なもの」を読んだ時の恐怖譚への関心からだが、大きく見ればいまの研究に繋がっている。ここではベルクソンの「笑い」とともに不気味さを考える訳本をあげた。アイルランドの長期紛争の調査の中でも「不気味な笑い」によく出くわした。

プライベート・ゲイ・ライフ ポスト恋愛論

伏見憲明
学陽書房／1991

自分を語ること。そして、俯瞰した中に位置付けること。それが次の一歩を踏み出すすがとなる。三十才を目前にして、私が自らのセクシュアリティに向き合い、歩む道を一から見直すことになる端緒をつくった一冊だ。何が分かっているのか、その思いが自分の中に積み上がってゆく。取り替えられない自分が確かにある。怯まず進め。

読者の「こぶ」となるであろう一冊

オスカー・ワオの短く凄まじい人生

ジュノ・ディアス
都甲幸治・久保尚美訳／新潮社／2011

恋する者たちの欲望、劣等感、暴力を徹底して明るいトーンで描く青春小説。ドミニカ共和国生まれの作者にとって、ファンタジー、SF、英空世界の用語とイメージを通じてでなければ故郷の三十年にわたる奇々怪々な独裁が描けなかったということにガツンとやられる。歴史を書くとは、いったいどういうことか。

地べたの神 現代の〈低み〉からの福音

渡辺英俊
新教出版／2005

抑圧されたひとびとに優しい眼差しを、と説く本ではない。社会が変わるには、抑圧された小さくされたものとともにあり、彼らの眼差しで社会を見つめることが不可欠なのだ。彼らの姿から、自分の中で小さくされているものが見えてくる。これに向き合い自分が進む道を見いだすことができる。彼らが生きるように、私も生きてゆける。

「ノード」には「こぶ」という意味もあります。仙台で「こぶ」を生み出す活動を行うふたりに、2つのテーマで本を紹介いただきました。

酒井朋子（さかい・ともこ）東北学院大学教員。専攻は人類学。主な著作に「紛争という日常 ―北アイルランドにおける記憶と語りの民族誌」（人文書院、2015年）。現在、チリの軍政期の日常を描くタペストリー「アルピジェラ」を中心に、紛争や災禍にかかわる戯曲作品を展示する企画を準備中。仙台では2017年5月より展示を開催予定。

小浜耕治（こはま・こうじ）大学院在学中に仙台にできたゲイサークルの活動に参加。ほどなく東北HIVコミュニケーションズ（THC）の立ち上げに加わり、研究生活を擱ってコミュニティワークの世界へ。震災後には、多様なセクシュアリティに関する活動に本格的に取り組み始める。2013年、プロテスタント教会で洗礼を受ける。クイアと聖的統合を目指す。

東北奇譚 ｜01｜青森｜ 奥脇嵩大 青森県立美術館学芸員 青森は巨大な遺失物取扱所である。 東北奇譚

青　青森には「現在」しかない。

3年前青森市に居を移して以来、いつしかそう思うようになった。異論は即座に出るだろう。独特の歴史風土に思まれた青森に「現在しかない」とは何事か。青森がルーツとして大事にしている「縄文」は、何千年も前の過去の文化ではなかったか。確かに青森には縄人の痕跡の数々が残る。ただ少し掘れば見つけることができるそれらは少し身近過ぎるように思え、そしていまこの時に価値付けられるというよりも現在に属すといえないだろうか。独自の歴史風土を強みとする青森を斜めに切り取ると、この土地の過去が現在的な価値観のもと発見されたものである。その意味で青森には「現在」しかない、という見方もまた可能なように思う。

ところで青森はいま、空前の美術館建設ラッシュを迎えている。八戸市では設計者を公募し、弘前市では「吉野町煉瓦倉庫」を中心に美術館を核とした改修計画が進む。それぞれが2020年の開館に向けて動いているいま、素朴に思いを馳せてみたいのが「美術館のある風景」についてである。かつて寺山修司は美術館を「巨大な遺失物収容所」と、世界はあらかじめ人々によって記憶されつくしてしまっている。だから、「何を忘れるか」だけが問われることになる」と言った。現在しかない青森で次々と「遺失物収容所」たる美術館をつくられることは、ヒストリカルな意味合いでは、青森は忘却から自分たちの未来を拓くための場でもあるのかもしれない。

忘却が現実の青森と交差する時、「遺失物収容所」の役割が求められる。そして記憶と現実を作用させ、人と自然の多様な生を想像させる風景をひらく場所であること。そこに青森の美術館の意義があるように思う。ひらかれるべき風景のヒントとして以下の覚書を挙げ、本稿を終えたい。

俺が仕事帰りに焚火山通ったらパーっと山が黄金色に光ってねえ。夕焼けとかじゃないよ、ほんとに山が光ってるんだ。そのとき仏様はいるなーって思ったよ。

※青森市・五所川原市・黒石市近郊の山、古くは仏教信仰が強んで、付近の山では旧暦の4月と7月に御刈祭（おかべ・さなぶり）陸稲収穫がある。

東北6県で美術や表現の分野で活動する専門家による寄稿シリーズです。毎回、各県の書き手のみなさんに、その土地の現在進行形を伝えていただきます。

JOURNAL 1号

「アッペトッペ」ができるまで

アッペトッペオガル・カタカナシ記念公園の試みと企み

仙台市地下鉄東西線の開通とともに誕生した荒井駅、その周辺は東日本大震災の際に津波が到達したエリアであり、地元の方や震災後に住み始めた方など、多様な住民が暮らしている場所です。今回、アーティストユニットKOSUGE1-16は、童話詩人スズキヘキと郷土研究家の天江富弥をモチーフに、地域の方々と共同で作品制作をおこないました。その展覧会の会場となったのは、荒井駅から東西線でつながっている国際センター駅です。どのようにして展覧会がかたちになり、そこで何が起こったのか、関係者の声とともに振り返ります。

KOSUGE1-16

撮影：酒井耕

① 2016年4～6月

2016年度アートノードのメインプログラムのアーティストに、仙台と関わりの深いKOSUGE1-16が浮上。その土地ならではの歴史や人物をテーマとした「The Playmakers」シリーズの仙台の制作を打診しました。
6月にKOSUGE1-16土谷さん、1回目の来仙。地域メディア史研究家の渡邉慎也さんから「おてんとさんの会」を教えていただき、その流れで会との関わりが深い国分町「炉ばた」へ。スズキヘキ、天江富弥について伺い、仙台文学館も見学。

② 2016年8～10月

土谷さん、2回目の来仙。関係者へのヒアリング、ヘキにまつわる資料見学などをおこない、展示プランについて打合せました。3回目の来仙時には、国際センター駅を訪れ、留学生の参加するイベントを見学し、関係者や地元アーティストとの具体的な打ち合わせ、制作場所の相談をおこないました。

天江富弥さんのことも知っていたので懐かしい気持ちになったのと、子供たちが遊べる場があればいいかなと思い、アトリエとして建物の1階をお貸しました／童場哲夫さん（もろやファームキッチン）

③ 11月上旬 鈴木楫吉さん＋土谷さん アトリエでのインタビュー

滞在制作スタート！荒井のアトリエにて、土谷さんと鈴木楫吉さんが初めて顔を合わせ、インタビューを行いました。

④ 11月16日 町内会・ちゃいるどらんどでのワークショップ

ハナカタマサキさんが来仙し、イトウユウコさんとともに、ちゃいるどらんど荒井保育園と荒井東町内会（復興公営住宅）の集会場にてワークショップを開催し、展示の素材を制作しました。

ワークショップに参加して、「アララギ」（短歌結社誌）でスズキヘキさんの名前を目にしていたことを思い出しました／荒井東町内会のみなさま

子どもたちも先生も一緒にワークショップを楽しみ、これからの活動のヒントや刺激をいただきました／ちゃいるどらんど荒井保育園の先生

⑤ 12月上旬 アトリエでの制作

荒井のアトリエに加え、卸町・ハトの家ではイトウユウコさんがカーペット制作をするなど準備も佳境に。

⑥ 12月15～26日

いよいよ展覧会スタート！初日からこどもたちが来て、カタカナの形をした遊具で遊び、青葉の風テラスが賑やかな空間に。

私は毎晩のようにヘキおんちゃん、天江のおんちゃんに会っていましたが、二人の雰囲気が展示に現れていたと思います。子どもたちが集んで集まること自体が、二人の世界だと感じました／加藤潔さん（郷土酒亭元祖炉ばた）

新感覚の楽しい催しでした。あの世から声がします。天江「ヘキよ、たまげたな。俺たちこけしになった」。ヘキ「んだ。世の中もだいぶ変わったもんだ」／鈴木楫吉さん（おてんとさんの会副会長・スズキヘキ長男）

⑦ 12月17日 外国絵本のおはなし会

仙台に暮らす外国人の方々が母語で読み聞かせをおこなう、「外国絵本のおはなし会」に留学生が多数参加。カタカナシ公園が満員状態になりました。

さまざまな言語で外国の絵本や遊びをみなさんにご紹介する「外国絵本のおはなし会」。今回はユニークなアート空間で、外国人ボランティアの方による言葉の響きや絵本の魅力を楽しんでいただきました／八巻優子（仙台国際センター交流コーナー）

⑧ 12月18日 こけしぼっこのこけし劇 ホヤちょうちんのお出迎え

ヘキと天江のこけし（KOSUGE1-16制作）を使い、炉ばたを舞台にした新作劇（～こけしが語る宮城の民話～こけしぼっこのこけし劇）公演と、ワークショップ「ホヤちょうちんのお出迎え」を開催しました。

「こけしの天江富弥氏」しか知らなかった私たちは、今回「会星・天江のおんちゃん」とお仲間たちの足跡に初めて出会いました。時空を超え「炉ばた」で、おんちゃんたちの四方山話に耳を澄ましてみたくなりました／小島典子（こけしぼっこ代表）

⑨ 12月23日 おがる影ワークショップ カタカナシ記念トーク

タノタイガさんの「おがる影」ワークショップに、留学生の方が多数参加。ギャラリートークでは、展示場所を巡りながら土谷さんが解説しました。

⑩ 12月25日 ハナカタマサキバンド プレジャーマーケット

スズキヘキの曲をアレンジしたものと、留学生に聴かせてもらったキルギス、ラトビアの歌曲を演奏したハナカタマサキライブには、おてんとさんの会の方々がコーラスで飛び入り参加。プレジャーマーケットも開催され、会場は大盛りとかり、児童文化学者の加藤理先生もお見えになりました。

大人も子どもともとも楽しむ仙台の児童文化活動の原点を思い出させてくれました／加藤理さん（文教大学教育学部教授）

転換期にある「公園」の在り方の大きなヒントだと感じました／豊嶋純一さん（特定非営利活動法人都市デザインワークス・プレジャーマーケット主宰）

[左] **天江富弥（あまえ・とみや）** 明治32（1899）年～昭和59（1984）年／本名 富蔵、仙台市生まれ、郷土研究家。ふるさとを愛し、ヘキをはじめ多くのひとびとと、ゆやぎの文化を育みました。「オンチャン」の名で親しまれ、童謡・こけし・絵・俳句―いろいろな分野でみんなのカになりました。

[右] **スズキヘキ** 明治32（1899）年～昭和48（1973）年／本名 鈴木栄吉、仙台市出身。詩人。子どもたちのために、詩を書いたり、童謡を作ったりしました。はなし言葉の音を大切にするために詩や童謡にカタカナを使いました。「スズキヘキ童謡集」を残しています。

こどもアートひろば展覧会を振り返って

土谷 享 KOSUGE1-16

「童謡」や「児童文化」という言葉は天江富弥やスズキヘキが活動した比較的あたらしい言葉だという事を知った。それ以来、しっかりとした定義が定まらずに個々の解釈によって説明されきた言葉だ。ある時は「教育産業」の中で、ある時は「文化」の中で使われる。かつて「童謡」を介して出会ったヘキや富弥らはそんなことはよそ目に、「子供の為」という詩作では無く、独自の詩を追求し、その結果がまたまた「童謡」と呼ばれた／呼ばれたくない印象を受ける。お金にするつもりは無く、教育に取り込まれるのは嫌いで、芸術も嫌い。しかし、表現をする事、表現を分かち合う事は大好きで、童謡専門雑誌の創刊、ストリートライブ、大規模な講演会、自然科学と芸術を取り入れた林間学校など、アーティストイニシアティブによって多種多様な企画や場を仕掛けてしまう。いわゆるカキカッコ付きの「芸術家」をであり「芸術的」であったと思う。

従来の形式に捕われない彼らの活動からは学ぶものが多くある。彼らが創刊した日本最初の童謡専門雑誌「おてんとさん」は東京を介在させずにインターローカルなネットワークを促進させた。スズキヘキは「原始童謡論」や「カタカナシ」により方言と音を大切にし、郷土研究家ともいわれる富弥は、東北各地に伝承されていた文化をユーモラスに再解釈し実践した。日本全国が標準化され始めた時代の中に居ながら、地域の価値に目を向け、新たな実践につなげた。およそ100年経った現在においても、彼らの提起は有効である。

今回のプロジェクトは当時の活動から幾つかを引用し、なぞらえたイベントを企画した。急ぎすぎたグローバルスタンダードの反動が世界中で吹き荒れる現在においては多いに参考になるものだ。地方の中のニッチと丁寧に対峙する事で、場がつくられ、仲間がつくられ、文化がつくられ、ネットワークがつくられていったのだろう。これはカタカナシ記念公園でのあり方にも通じる。

そして12月26日に会期を終えて、この展覧会を開催した事が新たな出発点だった事に気が付いた。今回の沢山の出会いが、枝葉の様に仙台の大空から再びインターローカルに広がって行く事を今後に期待したい。

こどもアートひろば 展覧会
アッペトッペオガル・カタカナシ記念公園
2016年12月15日(木)-26日(月)／仙台市地下鉄東西線 国際センター駅2階 青葉の風テラス
【企画制作】KOSUGE1-16【参加アーティスト】磯崎遺佳（アーティスト）／イトウユウコ（布物作家）／こけしぼっこ（人形劇グループ）／タノタイガ（美術家）／ハナカタマサキ（ミュージシャン／アニメ映像作家）（主催）せんだいメディアテーク（公益財団法人 仙台市市民文化事業団）（助成）損保ジャパン日本興亜「SOMPOアート・ファンド」（企業メセナ協議会 2021 Arts Fund）

KOSUGE1-16（こすげいちのじゅうろく）
2001年に東田智志乃（くるまざく・ちしの）、土谷享（つちや・たかし）のアーティストユニットとして活動開始。あいちトリエンナーレ2010、2010年「こどものにわ」（東京都現代美術館）など、出展多数。せんだいメディアテークでは2006年に体験型アートイベント「青葉緑日」へ参加したほか、2008年の「ART仙台場所」での（どんどこ！巨大紙相撲）が、現在も市内各地で行われている。
kosuge1-16.com

art node TALK

アートや文化の今を聞く

2017年2月25日（土） 16:00-19:30
開場15:30（ホーメイ実演あり・休憩含む）
トーク・パフォーマンス：山川冬樹（現代美術家／ホーメイ歌手）
聞き手：千石英世（アメリカ文学者／文芸評論家）
【会場】Gallery TURNAROUND（青葉区大手町6-22久光ビル1F）
TEL 022-398-6413 ／ http://turn-around.jp/
【参加】1,000円（定員35名、要事前申し込み）
【申込】info@turn-around.jp まで

現代美術家でホーメイ歌手の山川冬樹さんは、自らの声・身体を媒体に視覚、聴覚、皮膚感覚に訴えかける表現で、音楽／現代美術／舞台芸術の境界を越えて国際的に活動されています。

「空間」とは「身体」が例に折り返されたものであり、「身体」とは「空間」が内側に折り返されたものである……この「空間」と「身体」をめぐる感覚が、さまざまな形に広がって表現に結びついていると山川さんはおっしゃいます。仙台で初となる今回のTALKではパフォーマンスの上演に加えて、自らのルーツにあたる旧作から最新作のテーマとなっている病と隔離の問題まで、ご自身の作品解説を軸にしながら、世界と身体との創造的な関わりについてお話しいただきます。聞き手にはTURNAROUNDとつながりが深い文芸評論家の千石英世さんをお招きします。

art node MEETING

自由参加型公開会議

アートノード・ミーティング02
KOSUGE1-16と「アッペトッペ」を振り返る
2017年2月19日（日） 16:00-18:00

【会場】せんだいメディアテーク 7階スタジオa
【参加】無料・申込不要・直接会場へ
【出演】土谷享（アーティストユニット KOSUGE1-16）・甲斐賢治（せんだいメディアテーク アーティスティック・ディレクター）

「アートノード・ミーティング」は、アートノードにまつわるあれこれを公開し、より多くの意見や視点を得て、その意義をみなさんとともに深めていくイベントです。第2回は、アートノードが昨年展開したプロジェクト「アッペトッペオガル・カタカナシ記念公園」（企画制作：KOSUGE1-16）を軸に、4月からの流れを振り返ります。また、アートノードが進めているこのほかのプロジェクトについても現状報告します。